



生かし世界の湿地を守る

日本一大きな湖、琵琶湖を有する滋賀県。
世界に誇る美しい湖を守るため、
地域ぐるみで環境保全に取り組んできた。
そのノウハウを学ぶべく、イラクの研修員がやってきた。

滋 賀 県

滋賀県

面積4,017平方キロ。人口約140万人。電気機器、輸送機械や化学製品など、県内総生産に占める第2次産業の割合は全国1位。一方で、信楽焼などの伝統産業も数多く残っている。日本最大の面積を持つ湖「琵琶湖」の恩恵を受け、県の中央部では農業と漁業が盛ん。産学官民の連携による環境保全活動が行われ、「環境先進県」と標榜している。

経験と研究成果を 途上国へ

京都駅からしばらく電車に揺られていくと、目の前に大きな湖が映った。どこまでも続く水面は、まるで海のようにも見える。そう、日本人なら誰もが知っている琵琶湖。日本最大の面積を誇るだけあって、その存在感に思わず言葉を失う。滋賀県の中心に位置する琵琶湖は、いわば関西の水がめ。県の6分の1を占める巨大な湖は、滋賀、京都、大阪、兵庫の1400万人の生活用水となつている。また貴重な生物の生息地でもあり、冬に飛来するコハクチョウやヒシクイなどの渡り鳥を見ていると、水鳥の楽園のようにも感じる。1993年にはラムサール条約※1にも登録されている。

しかしこの美しい湖も、かつて深刻な汚染を経験した。70年代、高度経済成長に伴う工業化と都市化、ライフスタイルの変化に伴い、環境破壊が急速に進んだ。77年には、ついに初めて大量の赤潮が発生。当然のことながら飲み水も汚染され、人間の生活にも多大な影響を及ぼした。この目に見えた変化が、地域の人々を奮い立たせた。何としてでも、自分たちの琵琶湖を元の姿に戻さなければ。女性グループが立ち上がり、汚染の原因とされるリンが入った合成洗剤の使用を見直すなど、各地でさまざまな運動が起こった。そんな住民たちの熱意を受けて、県は80年に「滋賀県琵琶湖の富栄養化防止に関する条例（琵琶湖条例）」を施行。工業排水などに含まれる窒素やリンを厳

琵琶湖の教訓を



ヨシ葺き職人の竹田さん(中央)の作業場では、ヨシの活用方法について議論。琵琶湖のヨシは万葉集でも歌われている

しく規制するとともに、全国に先駆けて家庭用有リン合成洗剤の使用を禁止。流域下水道、公共下水道、農村集落排水処理などの整備を急速に導入していった。このように、地域ぐるみの努力で生まれ変わった琵琶湖。86年にはこの地を拠点に財団法人国際湖沼環境委員会（ILEC）が発足。世界各国の研究者が集まり、世界の湖沼保全、環境と調和した持続的開発をけん引すべく、湖沼環境に関する情報やデータの収集、調査研究、世界湖沼会議の開催などを手掛けている。

さらにILECが力を入れるのが、開発途上国に湖沼管理のノウハウを伝えるための研修事業だ。「世界の湖沼を守っていくため、途上国を支援していくことは、私たちの責務です」とILEC支援研修課の望月孝幸課長。琵琶湖の経験と膨大な研究成果を糧に、国際協力にも積極的に取り組む。

日本の現場で学ぶ 湿地保全の大切さを知る

ILECは年間を通じて、JICAとも連携し、琵琶湖を舞台にいくつもの研修を実施。その一つが「イラク南部湿地帯保全」コースだ。

かつては、中東最大の生態系を有していたイラク南部の湿地帯。しかし70年代以降、サダム・フセイン政権時代に、石油開発のために湿地帯を乾燥化させるなど、無秩序な開発により環境破壊が進行。また、イラクを南北に縦断し、世界四大

文明の一つであるメソポタミア文明を生み出したチグリス・ユーフラテス川の上流部にある国が、ダムなどによる大規模な取水を実施し、イラク南部湿地帯の広大なエリアで水量不足が発生した。2003年に旧政権が崩壊して以降は、政府や研究機関などにより懸命に再生が図られてきたが、いまだ体系的な保全活動が行われていない状態だ。

これを受けJICAは05年、イラクの環境省、農業省、水資源省、大学などの行政官・研究者を対象にした研修をスタート。ILECが実施機関となり、行政、研究、住民活動の3方向から、琵琶湖周辺の取り組みが包括的に学べるプログラムを提供している。昨年11月下旬から2週間、滋賀県を訪れたイラク人研修員たち。この日は、琵琶湖湖畔に拠点を構える琵琶湖・淀川水質浄化協働実験センター（Biyoセンター）を訪ね、実際に湖岸をフィールドとした研究・実験の様子を視察した。「琵琶湖の環境が守られているのは、今もこうして問題を迅速に把握するための努力が続いているからなんです」と水資源省イラク湿地復元センター研究計画部のハイデル・ラフタ・アリさんは熱心にメモを取る。

また、地元随一のヨシ※2葺き職人、近江八幡市安土町の竹田勝博さんを訪問。湖畔に群生するヨシは生物にとつて大切な生息地。さらに水中の窒素やリンを養分として吸収し、水質浄化の機能も果たす。その機能を十分に維持するため



し尿分離トイレ（エコサントイレ）と雨水の利用方法、有機農業などについて学ぶため、公益社団法人日本国際民間協力会（NICCO）の琵琶湖モデルファーム（滋賀県竜王町）を訪問。「南部湿地帯の浮き島で伝統的に続いていた農業・漁業を営む生活を復元する参考になった」と研修員たち

には、定期的な手入れが必要であることから、滋賀県では刈り取ったヨシを、屋根や障子、ついでなどの材料として古くから活用している。農業省のタリク・カジム・マイアさんは「南部湿地帯にもヨシがある。地域住民を巻き込み、竹田さんのように伝統と環境を守る取り組みを推進したい」と意欲を見せていた。この5年で琵琶湖を訪れたイラク人研修員は約50人。「国の縦割り組織の枠を超えて連携し、日本の研修で学んだことを生かして湿地帯の保全に全力で取り組んでもらいたい」とコースリーダーを務める京都大学名誉教授の松井三郎さんは期待する。

イラクの南部湿地帯に、一日も早く、美しく、十分な水が戻るように。今後、琵琶湖での経験が、イラク南部で花開く日も遠くない。そう信じている。



湖南中部浄化センターでは、流域下水道と窒素・リン除去について学んだ

※2 湖沼や川辺に生育するイネ科の植物。関東ではアシとも呼ばれる。

※1 正式名称「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」。条約締結国は、国内で1カ所以上を登録指定湿地とし、ワイズユース（賢明な利用）を推進しながら、水辺の生態系保全に取り組む。